18 世紀英語における強意副詞の用法：特に 'maximizer' に関して*

隈 元 貞 広

強意副詞の分類は様々になされているが、Quirk, et al. (1985) が最も適切に分類している。そこでの分類をチャートで示すと以下のようになる[1]：

		emphasizer		
intensifier	——	amplifier	——	maximizer
		downtoner		booster

Quirk らは強意の意味を含むすべての副詞類を 'intensifier' と呼び、それらをまず 'emphasizer'、'amplifier'、'downtoner' の三つに分けている。ここで用いられている 'emphasizer' は従来の法副詞 ('modal adverb': *certainly, really*, etc.) で、'amplifier' が従来の強意副詞 ('intensive adverb')、'downtoner' は緩和副詞である。そしてさらに 'amplifier' を 'maximizer' と 'booster' に分けている。前者が *completely*、*entirely*、*thoroughly* など、いわゆる「完全に、完璧に、全く、すっかり」等を意味する強意副詞で、後者が *exceedingly*、*greatly*、*terribly* など、いわゆる「非常に、とても」等を意味する強意副詞である。Quirk, et al. (1985) における陳述からも推測されるように (p. 590)[2]、強意副詞——上記分類による 'maximizer' と 'booster' ——は、意味特定に困難な面があるためか、従来一般的な言及はあるものの、具体的な観点からの観察および統計による記述研究が少ない。確かに、'booster' は、法副詞 ('emphasizer') や様態副詞との意味機能の峻別が困難な場合が多々あるが、しかし 'maximizer' の持つ強意機能 ("the absolute upper extreme") は比較的特定可能である[3]。また、量的に強意副詞の中心をなすのはこのチャート中の 'booster' であるが (これはその種類の多さ、また通常の様態副詞が徐々に 'booster' 化していく点などが研究のポイントとなっている)、しかし、用法の点では、チャート中の 'maximizer' の方が、動詞や形容詞との共起関係や文中での位置の問題などにおいていろいろな傾向を示しており、その時代的な特徴および変化を見る必要がある。本論文では 'maximizer' に焦点を当て、18世紀におけるその用法を、1) 共起する品詞との関係・分布、2) 個々の動詞との共起関係・傾向、3) 文中での位置 (肯定平叙文の場合) の三つの観点から観察する。Greenbaum (1970) も、ある同質の副詞群について、他の語との共起関係などの調査の必要性およびその成果の可能性を示唆している (p. 13)[4]。

調査対象となる18世紀文献のコーパスは小説、戯曲、評論、書簡を含む以下の19の文献である (年代順)：

William Congreve, *The Way of the World: A Comedy* (1700) (University of Nebraska Press, 1965)
George Berkley, *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge* (1710) (Clarendon, 1901)
Joseph Addison & Richard Steele, *The Spectator* (March 1711 – December 1712, June – December 1714) (Routledge, 1891)
Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (1719) (Oxford World Classics, 1998)
Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (1726) (Oxford World Classics, 1998)
John Gay, *The Beggar's Opera* (1728) (Oxford, 1926)
Alexander Pope, *Letters* (1729-35) (Oxford, 1956)
Samuel Richardson, *Pamela* (1740) (Oxford World Classics, 2001)
Tobias George Smollett, *The Adventures of Roderick Random* (1748) (Oxford World Classics, 1999)
Henry Fielding, *Tom Jones* (1749) (Oxford World Classics, 1998)
Laurence Sterne, *The Life and Opinions of Tristram Shandy* (1760-67) (Oxford World Classics, 1983)
Horace Walpole, *The Castle of Oranto* (1764) (Oxford World Classics, 1998)
Oliver Goldsmith, *The Vicar of Wakefield* (1766) (Oxford World Classics, 1999)
Samuel Johnson, *A Journey of the Western Isles of Scotland* (1775) (Everyman's Library, 2002)
Hannah Cowley, *The Runaway* (1776) (Garland, 1979)
Richard Brinsley Sheridan, *The School of Scandal* (1777) (Oxford, 1971)
Fanny Burney, *Evelina* (1778) (Oxford World Classics, 2002)
Gilbert White, *The Natural History of Selborne* (1789) (Everyman's Library, 1949)
Jane Austen, *Sense and Sensibility* (1811) (Oxford, 1998)

1．頻度

本論文対象のコーパスでは、以下の10種類の 'maximizer' が見出され、それぞれ括弧の中の数値の頻度で用いられている[5]：

entirely (388), wholly (176), fully (110), completely (27), perfectly (288), totally (110), thoroughly (50), utterly (65), absolutely (173), purely (12)

単純に頻度の点から見ると、本研究の18世紀コーパスにおいては *entirely* (388) と *perfectly* (288) が最も頻繁に用いられている 'maximizer' であることが分かる。頻度としてその次に来るのが、*wholly* (176)、*fully* (110)、*totally* (110)、*absolutely* (173) の 4 副詞、そしてその半数ほどの頻度で *thoroughly* (50) と *utterly* (65) が用いられている。意外なのは、*completely* (27) の頻度の低さである。意味的には *perfectly* とほとんど同じ機能を持つと思われるこの副詞が、*perfectly* の288回という高頻度と対照的にこのように極端に少なく、予想通りに頻度の低い *purely* (12) とあまり変わらない数値を示している点、予想外であった。現代英語においては *perfectly* と *completely* の頻度にそれほど大きな差が

ないことを考えると一つの歴史的変化がそこに見られ、小さなトピックながら興味深い結果と言えよう。19世紀には *completely* の頻度はかなり高くなるので、18世紀から現代英語への *completely* の使用変化の転換期は19世紀にあると推測される。この *completely* の変化は、名詞構文の時代と言われる18世紀から、反動的に動詞構文が復権する19世紀へという、英語における時代的な文体変化の大きな流れの一部的な現象であろうと思われる。すなわち、副詞全般の用法、頻度が高くなる流れの中で *completely* の頻度も高くなっていったのではないかと推測される。

2．共起する品詞

2．1．分布

これら10種類の副詞の他の品詞との共起関係を調べると以下の表のような結果が得られた（括弧の中は%：空白部分は例なし）：

Table 1

	v.	adj.	adv.	ad.part.	n.	prep-ph.	Total
entirely	242(62)	78(20)		4(1)	32(8)	32(8)	388
wholly	103(59)	45(26)		1(1)	11(6)	16(9)	176
fully	87(79)	23(21)					110
completely	13(46)	14(50)			1(4)		28
perfectly	81(28)	173(60)	15(5)		8(3)	11(4)	288
totally	66(60)	34(31)		2(2)	3(3)	5(5)	110
thoroughly	33(66)	16(32)			1(2)		50
utterly	23(35)	40(32)			1(2)	1(2)	65
absolutely	105(61)	60(35)		1(0)	1(0)	6(3)	173
purely	3(25)	6(50)			1(8)	2(20)	12
Total	756(54)	489(35)	15(1)	8(0)	59(4)	73(5)	1400

Note: ad.part.=adverbial particle（いわゆる *go up, turn ont* など phrasal verb の一部である *up, out* などの副詞）// prep-ph.=prepositional phrase

この表から分かるとおり、多くは動詞か形容詞と共起している。興味深いのは副詞によって動詞と形容詞どちらかと共起するある程度の傾向が見られることである。動詞と共起する傾向のあるものとしては、*entirely*(62%)、*wholly*（59%)、*fully*（79%)、*totally*（60%)、*thoroughly*(66%)、*absolutely*(61%)の 6 種類の副詞、逆にどちらかというと形容詞と用いられる傾向を示しているのが、*perfectly*(60%)、*utterly*（62%)、*purely*(50%)の 3 種類の形容詞、動詞と形容詞ほぼ半々で用いられているのが *completely*（46% : 50%)となっている。全体としては動詞との使用が半数以上(54%)となっている。

Peters(1994) は、コーパスとしては小さいが、同じ18世紀の書簡について *completely* と *purely* を除く 8 種類のこれら副詞類の品詞ごとの分布を示している[6]。そこでは、一般様態副詞との使用が結構多いことに気がつく。ところが、上の表の中の *perfectly* の副詞との共起15例というのはすべて *perfectly well* の例、また残りの副詞との共起例としては particle との使用例しかなく、上記表中の強

意副詞が一般様態副詞を修飾する用法は、頻度、種類ともに非常に乏しいことがわかる。それで、特に書簡に多い現象なのか調べる必要がある。本研究のコーパスにも書簡は入っているが、今回はジャンルごとの数値を出していないので、今後ジャンルごとの数値を出す必要がある。

名詞との共起が59例（4 %）を示している点も注意すべきであろう。それは例えば次のような使用である：

purely my own; completely a puzzle; wholly a stranger; perfectly a stranger; entirely the aggressor; perfectly master, etc.

Jespersen(1927) は、名詞の *stranger* と完全性を表す形容詞 *perfect*、*entire*、*total* などとの関係に触れ、*stranger* という名詞には形容詞の要素が含まれるので *perfect stranger* の *perfect* と *stranger* の意味的関係は副詞的な関係、つまり *perfectly strange* という意味関係が含まれていると述べている[7]。上の表で見られる名詞との使用はいわば *perfect stranger* の副詞バージョンと考えられるであろう。確かに、例の中には *perfectly a stranger* などの例が多く見られ、それを裏付けている。また、Peters (1994)の初期近代英語の調査で名詞との共起が見当たらないこと、さらに、Jespersen の例のほとんどが18. 19世紀からのものであることを考えると、このような強意副詞と名詞との使用は18. 19世紀にしばしば現れるようになったと推測される。

さらに、Stoffel (1901)は、この種の用法に関して、Prof. Storm が Victorian English の俗語法 (vulgarism) であると言っているのはまことに正しいと述べている[8]。しかし18世紀にもこのようにけっこうな頻度で見られることを考えると、18世紀から19世紀へとどのように受け継がれていっているのか観察の必要がある。18世紀にも口語的あるいは俗語的なものであったのか、あるいは別の面があるのかも調べる必要がある。

2.2. 特定動詞との共起関係

次に、これらの副詞と特定の動詞との共起関係であるが、Greenbaum(1970)は、コーパスによる調査とは違うもう一つの共起関係調査方法として、実際のネイティブ話者を対象にした実験的方法を取って、これらの副詞と動詞との使用関係のデータを取っている。このように、書かれたコーパスと実際の話者というデータ収集源が異なる調査結果であるが、しかしそれは現代のそれら副詞の共起調査として貴重なものであり、また他に統計的なデータがないということから、本論文のデータ結果との比較として参考にしたい。彼は、3種類の 'maximizer'、すなわち *entirely, utterly, completely* の、個々の動詞との共起傾向を多くの被験者を対象にテストし、以下のような結果を得ている(pp. 91-4)(データの提示の仕方は修正を加えてある。I entirely ...(108)の括弧の中の数値は被験者の数である)：

I *entirely* ...(108) :

a) agree(89), disagree(19)

b) Ø

c) Ø

d) Ø

e) Others: Ø

my friend *entirely* ...(68):

a) agree(38), disagree(6)

b) dislike(2)

c) Ø

d) Ø

e) Others : trust(2), need(2), depend(up)on(2)

they all *utterly* ...(103) :

a) agree(5), disagree(6)

b) detest(6), dislike(3), abhor(2), loathe(2), hate(10), disapprove(2), despise(5), disgust(2), bore(2), disbelieve(2)

c) refuse(5), deny(3), reject(2), disregard(3)

d) fail(5), despair(4)

e) Others: abandon(2), disappear(2)

his father *utterly* ...(69) :

a) agree(3), disagree(3)

b) detest(6), abhor(2), dislike(2), hate(7), loathe(2), despise(7)

c) condemn(3), forbid(2), deny(2), disapprove(3), ignore(2)

d) fail(2), collapse(2)

e) Others : spoil(3)

I *completely* ...(70) :

a) agree(5), disagree(4), concur(2)

b) ϕ

c) deny(4), ignore(2)

d) forget(35), fail(3)

e) Others: give up(2)

my friend *completely* ...(117):

a) agree(4)

b) ϕ

c) deny(6), reject(3), ignore(16)

d) forget(38), fail(3), collapse(2), misunderstand(3), give in(2), lose way(2)

e) Others: astonish(2), baffle(2), disapear(3), trust(2)

まず *entirely* であるが、ほとんどが *agree*、*disagree* との使用となっており、共起する動詞に極端な偏りが見られる。*utterly* の場合、共起する動詞にはいくつか特定の意味を持つ動詞グループが形成されている。共起動詞に傾向があるが、それは複数のグループがあることが分かる。*completely* の場合、*utterly* と比べると種類、量ともに小規模な動詞グループであるがいくらか傾向がある。その中で特

に*forget*という単独動詞との使用が目立っている。

Greenbaum はこのような結果に見られる特に*utterly*の傾向を強調し、次のようにコメントしている（p. 83）：

1) many of the verbs collocating with ... *utterly* are attitudinal
2) (the attitudinal verbs) collocating with *utterly* express an unfavourable attitude
3) most of the verbs collocating with *utterly* and *completely* have a negative implication, suggesting disapproval, opposition, or failure

また、*OED*、あるいは他の研究者も、これらの*utterly*の傾向に関して同様のことを指摘している。*OED*は、*utterly*が共起する動詞に関して、それは非常にしばしば'verbs of perishing, refusal, etc.'と用いられると述べ、形容詞としては、17世紀後半以降、特に'words implying negation, defeat, or opposition'と共起する傾向にあることを指摘している[9]。また、Borst（1902）、Zimmer(1964)ともに、「negative な意味を持つ動詞や形容詞」との共起傾向を指摘している[10]。このような*utterly*の傾向は18世紀も同じであり、17世紀後半以降、現代に到るまで一貫して見られる傾向であるということができる。

本研究における10種類の副詞と個々の動詞の共起関係を調べると次のようになっている：

entirely(242):
1) phrasal verbs: take up(6), make up(3), give up(2), leave out, wrap up, clear up, swallow up, dry up, laugh up // take off, break off, draw off, cast off // sell out, do away, bring on

Others: fall(3), displease(2), appease, depend(12), trust(3), lose(4), remove(5), love, like, forget(8), agree(5), approve(3), omit(3), release, break, commit, owe(2), confine(3), believe, quiet, cure(2), ease, avoid, conceal(6), reconcile(2), change(2), reason, ruin, affect(2), relieve(2), finish, disregard, devote(2), comfort, destroy(2), neglect, force, satisfy, consume(2), obliterate, subdue, support, dislike, efface, exclude, alter, limit, persuade, disable, cover, depress, etc.

wholly(103):
1) depend(4), trust, rely
2) phrasal verbs: give up // strip off, cut off

Others: occupy(2), disapprove, divert, surpass, impute, devote, abstain, change, engross(10), decline, consume, exclude, alter, confine(3), extinguish, agitate, cover, dispirit, estrange, blur , etc.

fully(87):
1) comprehend(2), understand, acknowledge, know
2) intend(5), consider(3), hope, determine, purpose, detect

3) explain(7), persuade(6), convince(4), inform(3), show, prove, reckon, illustrate, confirm, imply, reason, express, clear, teach, describe, secure
4) satisfy(6), saturate, comfort, recompense, reward
5) phrasal verbs: make up // enter upon

Others: depend, ripe, prevail, govern, recover, repay, accomplish, accept, provide, heighten, etc.

completely(13):
1) phrasal verbs: fit up // take in, fence in

Others: supply, re-establish, ruin, finish, penetrate, etc.

perfectly(81):
1) agree(2), approve
2) understand(9), know(6), comprehend(2)
3) convince(5), account(for) (2), persuade, assure, describe
4) satisfy(3), cure, amuse
5) astonish, amaze, confuse
6) phrasal verb の例なし。

Others: wake, resemble, disconcert, remember(2), hate, admit, recover(6), restore(2), dry, establish (2), reconcile, re-establish(2), finish, etc.

totally(66):
1) neglect(3), forget(4), overlook, obliterate
2) mistake, fail, omit
3) eclipse(2), overpower(2), ruin, besmear, suppress, defeat, demolish, corrupt, destroy, discompose, unhinge, abolish
4) phrasal verbs: wash away, take away, give up

Others: trust, rely(2), absorb(3), contradict, confine(3), conceal, change(2), differ, subdue(2), condemn, spare, occupy, etc.

thoroughly(33):
1) convince(2), instruct, enlighten
2) phrasal verb の例なし。

Others: agree, despise(2), examine(3), pierce, satisfy, reconcile(2), learn, incense, heat, understand,

etc.

utterly(23):
1) abandon(3), undo, discard(2), forsake

Others: despair, neglect(2), reject(3), detest, disappoint, destroy, nonsuit, disconcert, extinguish, confound, spoil, unresign, exclude, etc.

absolutely(105):
1) require(4), insist(4), affirm, claim, promise
2) refuse(22), deny (4), reject(3), disapprove(2), forbid
3) resolve(2), determine, decide
4) break, tear, decay, ruin, overpower, pinion
5) phrasal verb: make over

Others: exempt, depend(3), govern, tranform, silence, hate, yield, desire, know, forget(3), recover, starve, condemn, excuse, remove, etc.

purely(3):
Others: recover, sleep(2)

これらの結果から次のような傾向が指摘できる：

entirely: 特に動詞の意味グループの傾向なし。逆に言えば、広範囲の様々な動詞と用いられる。特徴としては句動詞との用法が目立つ。句動詞との使用は他の副詞と比べて非常に多い例を示している。

wholly: 動詞グループとしてはそれほどの傾向なし。

fully: 動詞グループに量、範囲ともにかなりの傾向がある。全体で87例と少ないながらこのようにかなりきちっとまとまった動詞傾向を示しているので、その傾向はかなり強いと言うことができる。Greenbaum (1970) の実験結果ではこのような傾向は出ておらず、その指摘もない。*fully* のこの傾向は現代英語に向かって変化している可能性がある。

completely: 特に傾向なし。Greenbaum (1970) は否定的な意味の動詞との傾向を指摘しているが(P.36のコメントの3)、18世紀にはそのような傾向は特に見られない。この点も、現代英語に向かって変化している可能性がある。

perfectly: 傾向があり、動詞グループの範囲にも幅がある。*fully* に比べると動詞グループの量的面では劣るが、動詞の種類としては似たような傾向を示している。

totally: ある程度の傾向がある。1)、2)、3) のいずれの動詞グループも否定的な意味の動詞が多いことが分かる。Greenbaum (1970) は *utterly* と *completely* の否定的意味動詞との共起傾向を

指摘しているが、18世紀では明らかに *totally* も同様の傾向を示している。

thoroughly: 1）のような 1 種類のグループとの傾向がいくらか目立っている。

utterly: 意味グループの傾向は 1 種類だけであるが、Others の例からも分かるように、ほとんどが否定的な動詞と共起傾向にあるのが特徴である。これは先にも述べた、Greenbaum その他多くの研究者が指摘している通りで、18世紀もその点同様であると言える。

absolutely: 傾向がある。2）と 3）は否定的な意味の動詞になっている。

purely: Stoffel（1901）は、18世紀の *purely* の用法について、'as applied to recovered health' と指摘し、そのような *purely* の用法は現代では俗語的（vulgar）になっていると述べている[11]。現代英語において俗語的かどうか確信はないが、本コーパスでも確かに 3 例中の 1 例は *recover* との使用例となっている。

これらの個々の結果から推測されるように、'maximizer' は全体的に否定的な意味の動詞との使用傾向があると言える。そのような傾向の中で、Greenbaum（1970）の結果と異なる点として興味深いのは、これら18世紀の例には、共起傾向の強い否定的な動詞のグループとして、*dislike* や *hate* など否定的な感情を表す動詞群があまり目立たないということである。これも18世紀英語と現代英語の興味深い相違点ではないかと思われる。

特に偏っている共起関係については作品ごとの分布を調べ、特定の書き手の特徴か、あるいはそうではなく18世紀全体としての傾向であるのか調べる必要がある。それが個々の書き手の特徴であるとすれば、それは文体の問題としてまた別の面から考える必要がある[12]。

3．位置

次に、扱われている副詞類の文中での位置についてであるが、形容詞、副詞、名詞、前置詞句と共起する場合は、その位置はほとんどがそれらのすぐ前であり、特に位置について詳細な観察の必要はない。位置が問題になるのは動詞を強める機能で用いられる場合である。

Greenbaum（1970）は、'booster' と 'maximizer' の文中での位置に関して、前者は動詞の前で用いられるとその程度性の強さがより強調され、後者は文末で用いられた時がその程度の最上性（完全性）がより強められると言っている：

It seems intuitively that the intensifying effect is more pronounced when the degree intensifier is in pre-verb position, while the superlative effect is more likely to be present when it is in final position. (pp. 31-2)

しかし、ここで言う強意の効果の度合いの違いというのはかなり印象的な捉え方であり、実際の例を観察すると、動詞の種類との関係、前後の語や文脈との関係、動詞に後続する他の要素（目的語や前置詞句など）との関係で強意の度合いが微妙に変わるということが分かる。このような度合いの捉え方の不確実さは、August Western による、Greenbaum とはむしろ逆のコメント、すなわち、「I understand you *fully*. の *fully* を前置して I *fully* understand you. と言っても動詞の力と文の意味にはなんらの変化もない。ただ I *fully* understand you. という時は understanding を強調し、I understand you

fully. という時は understanding の completeness に重きを置くのであるが、いずれにしても実際上両者の意味に変わりはない。・・・なんら特別の理由なく前位または終位を用いることが非常に多い。」というコメントからも推測される[13]。それで、本論文では、扱っている副詞類の位置の問題としては、位置と強意性の関係ではなく、18世紀における用法の一面として、それらの副詞が取る位置の傾向を、統語的また統計的なレベルで示すことにする。

Greenbaum (1970) は、現代英語において強意・程度副詞（'booster', 'maximizer' 両方を含む）が取らない位置として、（1）助動詞の前、（2）文頭、の2つを挙げている。すなわち、次の#の位置には現れ得ないとしている[14]：

*My friend # will agree.
*They all # don't admire him.
*# they all admire his work.

実際、18世紀の例においてもこの位置には全く現れていないので、少なくとも18世紀にすでにこの規則性ができているということが言える。

ここで扱っている10種類の副詞の、平叙肯定文における位置の頻度を調べると、次の表のとおりの結果が得られた（左端が位置のパターンで、#が副詞の位置。破線で3つのグループに分けられているが、最初のグループが目的語を伴わない場合、2番目のグループが目的語を伴う場合、3番目のグループが助動詞を含む2つ以上の動詞類を持つ場合である。PrPh は前置詞句を表す。）：

Table 2

	entirely	wholly	fully	completely	perfectly	totally	thoroughly	utterly	absolutely	purely	Total
#-V	10	5	4		5	5	1	1	15	1	47
V-#					1						1
V-#-PrPh	18	9				1					28
V-PrPh-#	1										1
#-V-O	22	5	14	1	12	9	2	5	27		97
V-#-O	2										2
V-O-#	3	9	1	1	6		2		1		13
V-O-#-PrPh	14						1		1		26
V-O-PrPh-#	14										0
V1-#-V2	62	35	35	4	30	28	8	8	25		235
V1-#-V2-V3									1		1
V1-V2-#-V3	7	7	8	2	0	4	1	3	1		33
V1-V2-V3-#-V4								1			1
V1-V2-#	3								2		5
V1-V2-#-PrPh	6	2					1				9
V1-V2-(V3)-O-#	3		2		1		1		1		8

V1-V2-O-#-PrPh	7	2	1		1		1				12
V1-V2-O-PrPh-#	2		1	1							4
Total	160	74	66	9	56	47	18	18	74	1	523

この表の 3 つのグループにおいていくつかの目立つ傾向があることが分かる。まず最初のグループ、すなわち目的語を伴わないグループにおいては、単独動詞の場合その動詞の直前（47）、また前置詞句を伴う場合、動詞の後で前置詞句の前に用いられること（28）が特に顕著である。

第 2 のグループ、すなわち目的語を伴うグループにおいては、動詞の直前（97）、および目的語の後で前置詞句の前（26）の 2 つの位置が目立っている。これは第 1 グループと同様の傾向と言えるであろうが、しかし頻度の差には違いがある：第 1 グループ　47 : 28：第 2 グループ　97 : 26。また、第 2 グループにおいては、前置詞句を伴わない場合にも目的語の後に来ることが結構多い（13）点も注意すべきであろう。

第 3 のグループは複数の動詞を含む場合であるため、上の 2 つのグループとは異なる。2 つの動詞（助動詞＋本動詞）の場合その間に置かれる場合が圧倒的に多く（235）、3 つの動詞の場合 3 番目の動詞の前に来る場合が多い（33）。Western は現代英語に関して、「述語動詞が二個の語より成る場合、すなわち一個の助動詞と一個の本動詞とより成る場合は、副詞は規則的に両者の間に位置を占める。」（翻訳：p. 118）と言い、また、述部の動詞が 2 個または 3 個の助動詞を伴う場合、副詞は後中位（すなわち最後の助動詞の後、本動詞の前に用いられる傾向があることの理由として、「英語の場合最後の分詞形本動詞を形容詞のようにみなすためである」（翻訳：p. 122）と言っている。確かに複数の動詞の場合、上の表においても大きな傾向はそれに沿っていることが分かるが、しかし、それら 2 つの動詞（助動詞＋本動詞）の後に来る場合も少なからず見られる点注意すべきである。表の V1-V2-# 以下の 5 つのタイプがそれで、それぞれ 5 例、9 例、8 例、12例、4 例で、計38例が見出される。Western が「規則的」と言っている現代英語に比べると、少なくとも 'maximizer' に関しては、18世紀にはその規則とは異なる位置にも少なからず現れていると言える。

Lass (1999) において Rissanen は、初期近代英語においては、他動詞とその目的語の間に副詞を入れることを避ける傾向にあり、その理由は語順の制約、目的語名詞の語尾消失に主によると述べているが[15]、これは18世紀においてもすでに規則的になっていることがこの表からも分かる（2 つ目のグループの V-#O の例）。

以上述べたような傾向から考えると、上の表で最も例外的、あるいは規則から外れている例は、V-#-O の 2 例と V1-#-V2-V3の 1 例であろう。前者の 2 例は *entirely* の例、後者の 1 例は *absolutely* の例である。それらは次のように現れている：

V-#-O：This Incident broke *entirely* the King's Measures.（GT III-3）

his father commited *entirely* to his care the education of his younger brother.（TS 3045）

V1-#-V2-V3：I must *absolutely* be excused.（TJ XVII-3）

Greenbaum (1970) は、4種類の 'maximizer'、すなわち *completely*、*entirely*、*fully*、*utterly* と動詞の位置関係について、「動詞の前」と「動詞＋目的語の後」の場合の許容性 (acceptability) の度合いをテストし、次の Table 3 のような結果を得ている (p. 52)。それら4つの副詞に対応する動詞は、それぞれ *manage*、*prepare*、*observe*、*expect* となっている：

	+	1	?	No response
his sons *completely managed* the family business	62(73%)	10(12%)	12(14%)	1
his sons *managed* the family business *completely*	67(79%)	12(14%)	6(7%)	
my friend *entirely prepares* the meals	48(56%)	19(22%)	17(20%)	1
my frined *prepares* the meals *entirely*	69(81%)	6(7%)	10(12%)	
our men *fully observe* Johe	50(58%)	18(21%)	17(20%)	
our men *observe* Johe *fully*	68(80%)	7(8%)	10(12%)	
the students *utterly expected* his srrival	26(31%)	38(45%)	21(25%)	
the students *expected* his arrival *utterly*	6(7%)	66(78%)	13(15%)	

この表から分かる意外な結果は、*entirely* と *fully* はどちらかというと end position の方が許容性が高いということである。一般に、強意副詞は――'booster' 'maximizer' ともに――動詞の前に来るものと考えられているが、このテストの *entirely* と *fully* の結果は必ずしもそのような傾向を示していない。一方 *utterly* は、pre-verb position か end position かで言えば、pre-verb position の傾向を高く示しているが、しかしその位置を受け入れない反応 (－) が45% もある。この後者の反応はおそらく位置の問題というより、*expect* という動詞と *utterly* の意味関係の許容性と関係があるように思われる。いずれにしても *utterly* が極端に end position を避けられる傾向は明らかである。この *utterly* の顕著な特徴について Greenbaum は、"Lowest in acceptability is the active form of the sentence with *utterly* in final position. This suggests that for most of the informants *utterly* is restricted to pre-verb position when it is functioning in clause structure." (p. 50) と言い、また、"*utterly* is the only one of the degree intensifiers that for many native speakers of English cannot occupy a position after the verb." (p. 75) と言っている。しかし、来ないとは言っても、この表では、6例 (7%) という数値が出ており、さらに、? が13例 (15%) となっている点がむしろ気になる。というのも、本研究の18世紀コーパスにおいて見られる *utterly* の18例中、このような end position で用いられている例は全く見あたらない。むしろ現代英語において end position での用法の許容性が出てきている可能性がある。

以上、冒頭で述べられた18世紀の19の文献を対象に、'maximizer' と呼ばれる強意副詞の用法に関して、品詞との共起関係、個別の動詞との共起関係、また動詞と用いられる場合の位置の問題を見てきた。本文中で示されたような結果の分析、あるいは他との比較をさらに詳細化また拡大する必要がある。また、紙面の関係上本論文では触れていないが、この種の副詞を調査・分析するために取らなければならない視点はさらにいくつかある。例えば、動詞との使用における位置の問題一つをとっても、平叙肯定文のほかに、否定文の場合、不定詞節の場合、分詞節の場合の調査が必要である。また、形容詞、副詞、名詞、前置詞句との共起関係の問題、さらに、これらの強意副詞自体を修飾する他の要

素の問題などが主なものとしてある。すでに手元にあるこのような視点からのデータは本論文と継続する形で別の機会に提示する予定である。

注

＊本論文は日本英文学会九州支部第57回大会（2004年、九州大学六本松キャンパス）におけるシンポジウム「英語史の観点から18世紀英語を考える」（司会　田島松二、講師　末松信子、家入葉子、隅元貞広）での発表原稿を基に書かれたものである。

1）Cf. Quark, et al. (1985): pp. 589-90.

2）Cf. Quark, et al. (1985): p. 590.

3）Cf. Hans Peters (1994), p. 269: "maximizers must serve the communicative intention of expressing that a state, quality, etc. is present to the maximum degree."

4）Greenbaum は次のように言っている："A more valuable, if more modest, contribution might be made to the study of collocations if a relatively homogeneous class of items were selected and an investigation undertaken of the collocation of each item in the class with other items that are related syntactically in a given way." (1970: p. 13)　また Denison も Romaine (1998) において、副詞の統語研究の困難さにもかかわらず、できる限りの範囲で調査分析することの意義を述べている："adverbials are often optional elements and tend to have greater freedom of position than the obligatory elements. Nevertheless their syntax is important, if relatively poorly studied." (p. 232)

5）これらの副詞が強意副詞として用いられる場合は、動詞は 'gradable' でなければならない、つまり、'active' あるいは 'non-gradable' な動詞との使用の場合はそれらの副詞は一種の manner adverb (= in a complete manner, etc.) になると言われる："We have also noted that verbs of activity are virtually absent from the collocates of the degree intensifiers, though they appear with some frequency among the collocates of *certainly* and *really*. The verbs of activity that are acceptable collocates of degree intensifiers comprise the few instances of verbs of destruction that collocates with *utterly*. Apart from these exceptions, it seems that verbs of activity do not collocate with degree intensifiers." (Greenbaum, 1970: p. 83)　そして Greenbaum は 'gradable' な動詞の一つの例として次のような動詞を 'attitudinal' あるいは 'emotive' な意味の動詞として挙げているが、その判別もあまり明確ではない：verbs of attitudes: *want, require, desire, wish, agree, forget, admire, appreciate, prefer, despise, ignore, like, dislike, hate, regret, fear, abhor, loathe, suspect, doubt, irritate, annoy, enjoy* // emotive verbs: *admire, provoke, insult, offend, wound, hurt, upset* (Greenbaum, 1970: pp. 58, 62, 66-8)。しかし、このような言及における 'gradable' と 'non-gradable' の区別というのは必ずしも明確でなく、実際それはほとんど不可能と思われる。また、これらの副詞が例えば 'in a complete manner' その他の 'manner adverb' として用いられている場合もそこにはなんらかの強意要素が明らかに含まれていることから、本論文においては動詞の前後や節末に現れるこれら10種類の副詞のすべての例を対象としている。

6）Cf. Peters (1944): pp. 276-9.

7）Cf. Jespersen II (1927): p. 287.

8）Cf. Stoffel (1901): p. 56. "In 'He is quite the gentleman', *quite* is always a strong-stressed word-modifier; ... and Prof. Storm is quite right in saying that it is something of a vulgarism in Victorian English." と Stoffel は言い、そのセクションの例の中に次の Austen からの *perfectly* の例も挙げている："He is undoubtedly a sensible man, and in his manners *perfectly* the gentleman." (*Sense and Sensibility* (1833) 250)。

9) Cf. *OED* s.v. utterly, adv. 2. b & c.

10) Cf. Borst (1902) : p. 123; Zimmer (1964) : p. 89.

11) Cf. "The eighteenth century use of *purely*, as applied to recovered health, exemplified in some of the quotations just given, has drawn the attention of Thackeray." (Stoffel (1901) : p. 27)、さらに、"This use of *purely* has become vulgar in our days." (ibid.: p. 27)。

12) Greenbaum (1970)も次のように示唆している："In the stylistic analysis of literary works, a study of collocations may reveal the predilection of individual writers or genres for particular collocations, their avoidance of collocations that are frequent elsewhere, and their selection of collocations that are rare or unique." (p. 81)

13) Cf. ウェステルン『英文配語の研究』(斎藤　静訳：1955)、p. 89.

14) Cf. Greenbaum (1970): pp. 24 and 27.

15) Cf. Lass (1999): pp. 268-9: "In Early Modern English there develops a tendency to avoid placing an adverbial between a transitive verb and its object. This is no doubt largely due to the regularisation of word order: the loss of morphological marking of the object fixes its position close to the verb."

参考文献

Bäcklund, Ulf. "The Collocations of adverbs of degree in English". *Studia Anglistica Upsaliensia* 13.

Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.

———— 1970. *Verb-Intensifier Collocations in English*. The Hague・Paris: Mouton.

Hori, M. 1999. "Collocational Patterns of Intensive Adverbs in Dickens: A Tentative Approach". In *English Corpus Studies*, No. 6, pp. 51-65.

Jacobson, S. 1981. *Preverbal Adverbs and Auxiliaries: A Study of Word Order Change*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar* II. Heiderberg.

Lass, R. ed. 1999. *The Cambridge History of the English Language, Vol III:* 1476-1776. Cambridge: Cambridge University Press.

Peters, H. 1994. "Degree adverbs in Early Modern English". In D. Kastovsky (ed.), *Studies in Early Modern English* (Berlin・New York, Mouton de Gruyter), pp. 269-88.

Quirk, et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

Quirk, et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London・New York: Longman.

Romaine, S. ed. 1998. *The Cambridge History of the English Language, Vol IV:* 1776-1997. Cambridge: Cambridge University Press.

Stoffel, C. 1901. *Intensives and Down-toners: A Study in English Adverbs*. Heidelberg.

Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

Visser, F. T. (1963-73). *An Historical Syntax of the English Language*. 4 vols. Leiden: E. J. Brill.

荒木一雄・宇賀治正朋. 1984.『英語史 III A』東京：大修館書店

ウェステルン (著)：斎藤　静 (訳) 1955.『英文配語の研究』東京：篠崎書林

フランツ、ヴィルヘルム (著)：宮部菊男・藤原　博・久保内端郎 (訳) 1991.『初期近代英語の研究』東京：研究社

The Usage of Intensive Adverbs in the Eighteenth Century: With Special Reference to 'maximizer'

KUMAMOTO Sadahiro

Abstract

The present article deals with the usage of 'maximizers' (i.e. adverbs which "can denote the upper extreme of the scale", such as *perfectly, completely, entirely, thoroughly*, etc.) that are found in 19 works of the eighteenth century, including novels, essays, plays and letters (cf. pp. 1-2). The analysis is made from three viewpoints: 1) what kind of words (i.e. parts of speech) do the maximizers tend to cooccur with?; 2) what kind of particular verbs do they tend to cooccur with?; 3) what position do they have a tendency to take in the sentence? The results gained from these three analyses are shown in Table 1 (p. 3), the list of each maximizer with individual verbs (pp. 6-8), and Table 2 (p. 10-11).